

悠久の京を訪ねて Part IV

Vol.4



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

黄金色の洛中 — 聚楽第と金箔瓦 —

■重要文化財：京都府聚楽第跡出土金箔瓦

聚楽第は、天正14(1586)年に関白豊臣秀吉がかつて平安宮の大内裏があったことから「内野」と呼ばれていた上京の町の西のはずれに、関白公邸として築いた城郭です。

平成3・4年度に実施された聚楽第跡東堀と大名屋敷の発掘調査において、大量の金箔瓦が出土しました。金箔瓦は、桐文・巴文などの軒丸瓦、軒平瓦、飾り瓦、鬼瓦などの文様の凸面に、漆で金箔を貼っています。これらは、歴史上名高い聚楽第を代表する遺物であり、近世瓦研究の定点として貴重であるばかりではなく、当時の豊臣政権の権勢を知る上で

重要な資料であることから、一括して国の重要文化財に指定されました。

また、昨年度の発掘調査で聚楽第本丸南濠の石垣が良好な状態で見つかかり、現地保存されました。



巴文の金箔瓦

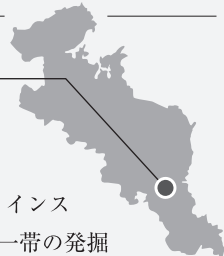
■金色に輝く大名屋敷の軒や棟

天皇が住まう御所と聚楽第を結ぶメインストリートにあたる現在の中立売通沿い一帯の発掘調査では、金箔瓦が数多く出土しています。これらには織田家、前田家、佐竹家、浅野家などの家紋瓦があり、一帯に大名屋敷が軒を連ねていたようです。

御所の西方、烏丸通と堀川通の間には大名屋敷が建ち並び、その向こうには、聚楽第が秀吉の強大な権力を象徴するかのようそびえ立っていたのです。

金箔瓦の輝きは、秀吉の権力の象徴だったといえます。

聚楽第跡



前田家の家紋瓦



織田家の家紋瓦